『明実録』の琉球史料（三）

目次

はじめに……1
凡例……3
参考文献……5

原文篇
穆宗実録　隆慶元年（一五六七）―隆慶五年（一五七一）……11
神宗実録　万暦元年（一五七三）―万暦四十五年（一六一七）……12
光宗実録　泰昌元年（一六二〇）〔関係史料なし〕……21
熹宗実録　天啓三年（一六二三）―天啓七年（一六二七）……21
付録　崇禎実録／崇禎長編／南渡録／明季南略
崇禎元年（一六二八）―崇禎十七年（一六四四）……23

訳文篇
穆宗実録……29
神宗実録……30
熹宗実録……44
付録　崇禎実録／崇禎長編／南渡録／明季南略……45

注釈篇

穆宗実録注……51
神宗実録注……53
熹宗実録注……96
付録注……99
語注索引……105

『明実録』の琉球史料（三）

和田久徳・池谷望子
内田晶子・高瀬恭子

はじめに

今回の「『明実録』の琉球史料（三）」は、「穆宗実録」から「熹宗実録」までの四実録を対象としている。このほかに、官撰の実録ではないが崇禎帝一代の記録である『崇禎実録』や、『崇禎長編』『南渡録』『明季南略』中の琉球史料を収録した。

この時期は、明の国初よりの基本政策である海禁が緩められた隆慶年間から、明が滅亡する崇禎十七年（一六四四）に当たる。この間に、明と琉球との関係は、従来の安定した宗属関係から、政治的にも経済的にも大きな危険をはらむものとなった。

まず隆慶（一五六七―七二）の末年以降、中国の海商が、海外貿易を公許されて東南アジア方面へ怒濤のように進出した。それのみならず、彼らは海禁の続く日本方面へも密かに渡航するようになる。また、ポルトガルが明との交易を開き、マカオに居留権を得て、ここと長崎とを結ぶ貿易に進出し、スペインはマニラを建設して、新大陸の大量の銀を東アジアに持ちこんだ。

こうした激しい状況の変化の中で、琉球は『歴代宝案』にみられるように、一五七〇年の暹羅への遣船を最後に東南アジア貿易から撤退し、以後琉球の朝貢品は精彩を欠いたものとなってゆく。

万暦年間（一五七三―一六一九）には、明の財政をゆるがし、その滅亡への一因ともなった万暦の三大征が起こった。その一つである朝鮮の役＝豊臣秀吉の朝鮮侵略（一五九二―九三、九七―九八）のために、明の日本に対する警戒感が最大に達したところに、薩摩の琉球侵攻（一六〇九）が行なわれた。琉球が薩摩の傀儡ではないかという疑惑が高まり、琉球の朝貢は十年一貢に制限された。

従来とは全く異なり、緊張に満ちたものとなった明と琉球と

の関係は、『明実録』の記述に色濃く反映されている。従来、比較的淡々とやや類型的な記事が続くことの多かったのに対し、今回の（三）では、個別の事件に関する福建や浙江の巡撫・巡按、または中央の高官の上奏文が具体的に引用される場合が少なくない。

例えばそれは、薩摩の琉球侵攻についての、あるいは南直隷や浙江、福建などで捕獲されたり逃亡した不審琉球船についての、また福建から琉球への密航者についての、そして浙江や台湾に出没する日本の兵船についての上言である。これらによって我々は、事態の詳細を知りうるのみならず、明が琉球を、また琉球と日本との関係をどのように認識していたのかを、生のかたちで知ることができる。

これにひきかえ、天啓年間（一六二一―二七）の記事は比較的簡略であるが、「熹宗実録」（二）の、朝貢使節に対する頒賜品の劣悪さを述べた上奏などは、明末の国家財政の想像を絶する困窮ぶりを示すとともに、天啓帝の統治に対する無関心や、明の国家としての破綻の実態を示すものといえよう。

さて、本冊の扱う明末のほぼ八十年間に、琉球では尚永、尚寧、尚豊の三人が新しく国王に即位した。彼らの請封に対し、明は最後まで冊封使を派遣した。とりわけ尚寧、尚豊の場合は、冊封使を派遣せず福建において琉球の使臣に対して詔勅を領受させる「領封」をもって代行しようという廷臣の多数意見を抑えて、皇帝が冊封使派遣を実施させているのは極めて興味深い。

付録として収めた崇禎年間（一六二八―四四）においても注目されるのは、反対を押して行なわれた琉球への冊封使派遣である。金を建国したヌルハチが遼東を征圧し、ハン位を継いだホンタイジが集権化をすすめて、明への重大な脅威となっている状況の中で実行された派遣である。

「『明実録』の琉球史料」は本冊をもって終わる。貴重な同時代史料である『明実録』が、琉球史研究に活用されることを希望してやまない。

なお崇禎年間の四史料についての解説は、それぞれの注を参照されたい。また、明滅亡後も琉球が正朔を奉じた南明に関する大量の第一級史料が、『歴代宝案』巻三六　弘光文稿、巻三七　隆武文稿に収録されていることを付記しておく。

「『明実録』の琉球史料（二）」の巻頭「はじめに」中の会同館の出入制限に関する解説について、その後事実関係に相違のあることが判明したので、二頁上段四―七行目を削除する。本冊の最後に孝宗実録（一四）・世宗実録（一四）注（52）につき、補注と訂正を付したので参照されたい。

（高瀬記）

凡例

原文篇

一、本篇は台北の中央研究院歴史語言研究所によって影印公刊された『国立北平図書館蔵紅格明実録鈔本』について、穆宗から熹宗までの実録のうち、琉球に関する記事を抄出し編纂したものである。

なお、付録として『崇禎実録』『崇禎長編』『南渡録』『明季南略』中の琉球関連記事を収録した。

一、編次は各朝実録によって年代順にし、抄出した記事には、各朝ごとに頭番号を付した。各実録に存する巻数は記さずに省いた。

一、抄録にあたっては原本の体裁内容を存することを原則としたが、下記の改変を行なった。

①明らかな誤字・脱字・衍字の類は、影印本付録の『明実録校勘記』によって訂正した。訂正した字句には、その右傍に○印を付した。『明実録校勘記』に記載のない場合でも、訂すべきと考えられる字句には、右傍の（　）内にその意を注記した。

②異体字・俗字・略字の多くは、正字あるいは通用の字体に改めた。誤解のおそれがない場合は、印刷の便宜上、原本の正字などにかえて略字体を使用したこともある。また同義の字は通用の字体に統一した場合がある。

（例　侄→姪、韡→靴、裡→裏、襪→韈）

③敬避のための空格の類は、これをやめて普通の記載とした。

④採録した記事の中で、琉球と直接には関係のない内容の部分は、これを省略した場合がある。省略した部分は点線符号で示した。

⑤記事の係わる年月・干支について、初出の年次の下の（　）内に西暦年数を示し、干支の下の（　）内には当該月の日数を示した。ただし同一年次であってもその年末などにおいて西暦が変る場合があるが、それについてはふれず、一律に示している。

⑥各記事には句読点を施した。

訳文篇

訳文は次の通りとした。

①いわゆる読み下し文とする。

②現代仮名遣いを用いる。

③原文の漢字はなるべく残す。
④異体字・俗字などは原則として正字（常用漢字を含む）あるいは通用の字体に改め、同義の字は通用の字体に統一した場合がある（例　賓・賣→齋、敕・勑→勅、舡→船）。
⑤明らかな誤用は注記せずに正しい字に改めた場合がある
（例　瓜哇→爪哇）。

注釈篇

注釈は次の通りとした。
①各朝実録ごとに注番号を付す。
②同一語・同一事項は注として再記しない。
③訳注全般に参照した辞書・文献は以下の通りである。これらについては個別に出典を注記しない。ただし必要な場合には（　）内に示した略称によって注記する。なお個々に参照した研究書・論文等については当該の個所に記すにとどめる。

なお、巻末に既刊の「『明実録』の琉球史料（一）」「同（二）」も含めた「語注索引」を付した。

参考文献

（　）内は略称

諸橋轍次著『大漢和辞典』　大修館書店　一九八四年修訂版

中文大辞典編纂委員会編『中文大辞典』　台北　中国文化大学出版部　一九七三年

漢語大詞典編輯委員会・漢語大詞典編纂処編『漢語大詞典』　漢語大詞典出版社　一九八五―九四年

愛知大学中日大辞典編纂処編『中日大辞典』　大修館書店　一九八六年増訂版

『アジア歴史事典』　平凡社　一九五九―六二年

『沖縄大百科事典』　沖縄タイムス社　一九八三年（『大百科』）

譚其驤主編『中国歴史地図集　第七冊　元・明時期』　上海地図出版社　一九八二年

『福建省地図冊』　福建省地図出版社　一九九〇年

臧励龢等編『中国古今地名大辞典』　商務印書館　一九三一年

青山定雄著『読史方輿紀要索引　中国歴代地名要覧』　一九三三年　省心書房影印本　一九七四年

国立中央図書館編『明人傳記資料索引』　台北　文史哲出版社　一九六五―六六年（『明人伝記』）

田継綜編『八十九種明代伝記綜合引得』　一九三五年　北京　中華書局本　一九八七年

『歴代宝案　校訂本』第一・二冊　沖縄県教育委員会　一九九二年（『宝案』）。なお『明実録』と関連する記事はすべて第一集にあるので、引用にあたっては第一集を省略し、例えば一巻一号文書の場合は〔〇一―〇一〕とする。

『歴代宝案　訳注本』第一・二冊　沖縄県教育委員会　一九九四年、九七年（『宝案　訳注本』）

李東陽等修『大明会典』　正徳四年（一五〇九）刊　汲古書院影印本　一九八九年（『正徳会典』）

申時行等修『大明会典』　万暦十五年（一五八七）刊　北京　中華書局活字本　一九八八年（『万暦会典』）

張廷玉等撰『明史』　北京　中華書局標点本　一九七四年

和田清編『明史食貨志譯註』　東洋文庫　一九五七年

陳侃『使琉球録』　嘉靖十三年（一五三四）自序　国立北平図書館善本叢書第一集　嘉靖間原刊本影印

郭汝霖『使琉球録』　嘉靖四十年（一五六一）自序　アメリカ議会図書館蔵本

蕭崇業『使琉球録』　万暦七年（一五七九）自序　台湾　学生書局　一九六九年

夏子陽『使琉球録』　万暦三十四年（一六〇六）自序　台湾　学生書局　一九六九年

胡靖『杜天使冊封琉球真記奇観』　崇禎年間　『那覇市史　資料篇第一巻三　冊封使録関係資料』　一九七七年

汪楫『中山沿革志』　康熙二十三年（一六八四）自序（東洋文庫蔵『勅撰奉使録』所収）
高岐『福建市舶提挙司志』　嘉靖三十四年（一五五五）後序　民国二十八年刊
黄仲昭等『八閩通志』　弘治四年（一四九一）　福建人民出版社　校点本　一九九〇年
林燾等纂修『福州府志』　万暦二十四年（一五九六）　北京　書目文献出版社　日本蔵中国罕見地方志叢刊　一九九〇年（『万暦福州府志』）
何喬遠等『閩書』　崇禎四年（一六三一）　福建人民出版社　校点本　一九九四年
謝道承等纂修『福建通志』　乾隆二年（一七三七）　江蘇広陵古籍刻印本　一九八九年（『乾隆福建通志』）
魯曽煜等纂修『福州府志』　乾隆十九年（一七五四）　台北　成文出版社　中国方志叢書七二号　一九六七年（『乾隆福州府志』）
陳寿祺等纂修『福建通志』　同治十年（一八七一）　台北　華文書局　中国省志彙編之九　一九六八年（『同治福建通志』）
趙汝适『諸蕃志』宝慶元年（一二二五）自序（馮承鈞『諸蕃志校注』一九四〇年、台湾　商務印書館　一九七〇年）
汪大淵『島夷誌略』至正九年（一三四九）撰（蘇継廎『島夷誌略校釈』北京　中華書局　一九八一年）
陳誠『西域行程記』『西域番国志』永楽十三年（一四一五）頃（周連寛校注『西域行程記』『西域番国志』北京　中華書局　一九九一年）
馬歓『瀛涯勝覧』永楽十四年（一四一六）自序　景泰二年（一四五一）加筆（馮承鈞『瀛涯勝覧校注』一九三五年、北京　中華書局　一九五五年）
鞏珍『西洋番国志』宣徳九年（一四三四）自序（向達校注『西洋番国志』北京　中華書局　一九六一年）
費信『星槎勝覧』正統元年（一四三六）自序（馮承鈞『星槎勝覧校注』一九三八年、北京　中華書局　一九五四年）
李賢等撰『大明一統志』天順五年（一四六一）刊（西安　三秦出版社　司礼監官刻初印本影印　一九九〇年）
黄省曾『西洋朝貢典録』正徳十五年（一五二〇）自序（謝方校注『西洋朝貢典録』北京　中華書局　一九八二年）
黄衷『海語』嘉靖十五年（一五三六）自序（台湾　学生書局　嶺南遺書本影印　一九七五年）
厳従簡『殊域周咨録』万暦二年（一五七四）自序（余思黎点校『殊域周咨録』北京　中華書局　一九九三年）
羅曰褧『咸賓録』万暦十九年（一五九一）序
張燮『東西洋考』万暦四十六年（一六一八）序（謝方点校『東西洋考』北京　中華書局　一九八一年）
茅元儀『武備志』巻二四〇「鄭和航海図」天啓元年（一六二一）

自序（向達整理『鄭和航海図』北京　中華書局　一九六一年）
茅瑞徵『皇明象胥録』崇禎二年（一六二九）序
何喬遠『名山蔵』崇禎十三年（一六四〇）序
『朝鮮王朝実録』韓国国史編纂委員会　一九五五―五八年（太白山史庫本）
日本史料集成編纂会編『中国・朝鮮の史籍における日本史料集成　李朝実録之部』（国書刊行会　昭和五十一年以後　既刊十一冊）
『訓読吏文　附吏文輯覧』国書刊行会　昭和五十年（『訓読吏文』）
向象賢『中山世鑑』順治七年（一六五〇）　琉球史料叢書五
井上書房復刻版　一九六二年（『世鑑』）
蔡鐸『中山世譜』康熙四十年（一七〇一）　沖縄県教育委員会『蔡鐸本中山世譜』一九七三年（『蔡鐸本世譜』）
蔡温『中山世譜』雍正三年（一七二五）　琉球史料叢書四（『蔡温本世譜』）
鄭秉哲『球陽』乾隆十年（一七四五）　球陽研究会編『球陽・原文編』角川書店　一九七四年
『琉球国由来記』康熙五十二年（一七一三）　琉球史料叢書一・二（『由来記』）
『琉球国旧記』雍正九年（一七三一）　琉球史料叢書三（『旧記』）
『那覇市史　資料篇第一巻五・六・七・八　家譜資料（一）（二）（三）（四）』　一九七六年―八三年（『家譜（一）（二）（三）（四）』）

追加

呉廷燮撰『明督撫年表』二冊　北京　中華書局　一九八二年
陳垣『二十史朔閏表』　北京　中華書局　一九六二年
池谷望子・内田晶子・高瀬恭子編訳『朝鮮王朝実録　琉球史料集成』榕樹書林　二〇〇五年